

324  
206

人生私見

一名余ガ信仰主義

武田明著

013676-000-6

324-206

人生私見 一名，余ガ信仰主義

武田 明（夢遊天外散士）／著

M43

ABA-0147





324

206

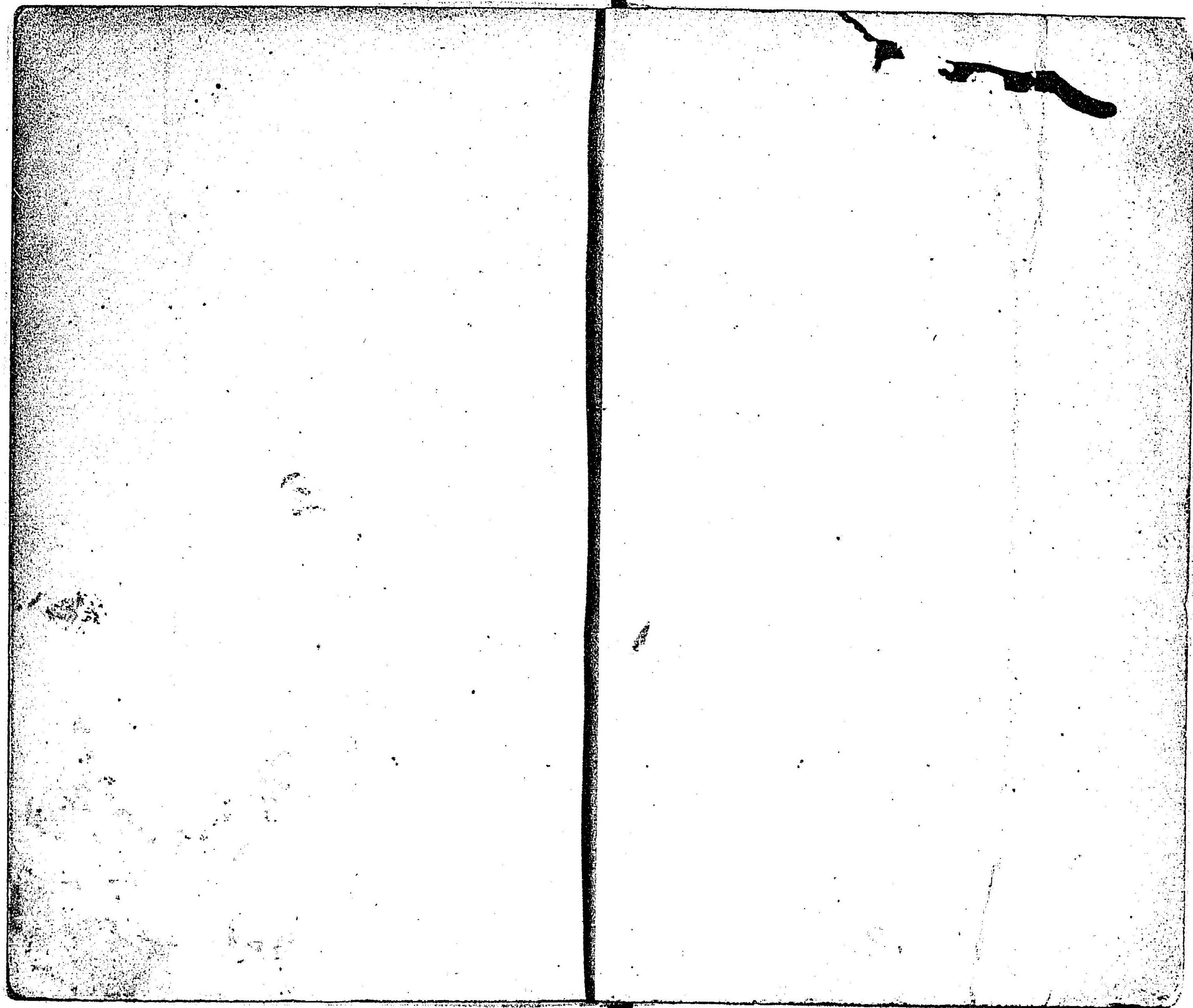
文學博士高楠順次郎序文  
退步居士佐治實然評  
文學博士前田慧雲評

# 人生和見

(一名余が信仰主義)

夢遊天外散士

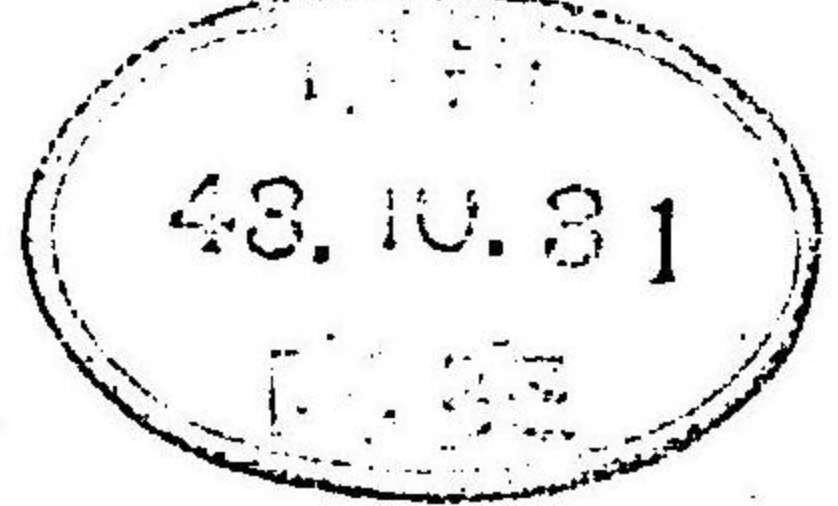






序

この一篇は武田明君が胸中に懐ける宇宙観、人生観の一斑を叙述せしものなり。初め宇宙の時空に於て無限なることより説起せし(一)、終りに人道の大本は高潔なる慈愛心に基づくことを述べ(十)、以てこの篇を結び。有無の中心を以て眞理の標幟となし(二)、苦樂の中道を以て世路の方針となす(八)、その中庸、中道の説自ら儒佛の教説に合し。その天命を説き(五)、天職を談じ(六)、因果相關





の理を叙するや、曾て儒佛の套語を假らず。世界は一元にして平等、而も物々相相の區分存すべきを説き(三)、集合性たる社會意識の重んずべきを示し(七)、現世主義が人間生活の要義たるべきを論ず(九)、終始哲學の偏見に墮せず、實利の臭味に染まらず、叙説必しも學術の形式によらずと雖、着想大に學界の思潮に觸るゝものあり。要するに君は宇宙、人生に對し極めて穩當にして着實なる信仰と主義とを懷抱せるものと謂ふべ

し。吾人は主張なき當代の實業界に於てかゝる質實なる告白を耳にするを得たるを悦ざらんと欲するも能はざるなり。一言を寄せてその發刊を祝す。

明治四十三年九月

籌村 高楠順次郎 識



自序

余や淺學短才にして營々自己の商業に従事するの外、未だ曾て哲學を研究し、宗教を攻究するの暇なし、然れども余自身は如何にして人世に生れ、如何なる目的を以て生活し、如何にして死すべきか、何故に忠孝仁義の道を守らざるべからざるか、何故に至誠其職を盡さざるべからざるか、其理由を判明せしむるは余自身の一大問題にして、又處世上の先決問題なりと信ずる者なり、



若し余にして此の問題の確乎たる解決を得ず、自己の何たるを知得せず、只空莫として生活し、習慣に依て道を守り、衣食の必要に驅られて止むを得ず職務を執り、以て余の一世を終らんか、實に余は何等の價値なく、恰も自ら玩具の風船球の如きものたらん、茲に於てか余は此の問題の解決を望むこと切にして、或は先輩の説を聞き、或は自己の經驗に徴し、沈思黙考して、直覺的に此の問題を解決しこれを以て絶大の眞理なり

りと自覽せるものあり、爾來之を以て己が主義とし、己が信仰として、人事百般凡て此の主義の下に解決實行せんことを期せり、特に本年は余が亡妻の三年忌に相當せるを以て其の記念として茲に單篇の覺書を記し、賢明なる先輩諸氏の座右に呈す、幸に閱覽の榮を賜ひ尙教示を吝むことなくば余の光榮之に過ぎず。

夢遊天外散士

明治四拾參年六月

武田

明

謹誌



## 目次

- 一 宇宙は無邊にして無始無終なることを信ず。
- 二 余は中庸は眞理なりと信認す。
- 三 余は凡て平等無差別にして然も區別階級制度ある事を信ず。
- 四 余は因果の道理を確信す。
- 五 余は運命の存在を信認す。
- 六 余は運命を信ずると共に各自天職を發揮し職分を守るべきものと信ず。



七 集合性たる人類の集合團體には團體

自身の精神の存在を信ず。

八 人世の行路は難易悲樂の中道を歩むべきものなり。

九 吾人は現在の状態に満足して將來に

大なる希望を懐かざるべからず。

十 慈愛は人類の調和濟にして集合の連鎖なり。

十一 結論

# 人生私見（一名余が信仰と主義）

武田 明 著

夫れ宇宙の雄大なる、天地を照映する日月も、無數算なき星辰も、塊然たる地球も、凡て之を包容圍繞して、尙ほ空間の如何に浩濶渺茫たるか吾人は其の際涯、境域を觀測する事を得ず、嗚呼、宇宙は絶大にして窮極する所なき、誠に不可思議なるものと云はざるを得ず、而して又宇宙の活動力の偉大なる、其の包容せる日月、星辰、地球等、大古より今に至るまで時々刻々、寸秒も休止する所なく、毫も一定の軌道を逸せず、列







に一定動かすべからざる眞理を、現實に吾人に與へて  
四  
日々に教導訓育せり、即ち時間は分秒も休む事なくして去りつゝ又分秒も休止する事なく、直に來りて吾人を迎へ、天に日月ありて地に晝夜を別ち、地上に茫漠たる外面あれば、地下に又千尋の内部あり、物體に表面あれば、裏面必ず之に加はり、有形なる物體あれば必ず無形なる空間之に伴ひ、洋々たる大洋には渺茫巍峩たる高山大陸必ず之に添ひ、地上に生れて活動するものは必ず死して不動の物體に化す、之れ宇宙の物體は森羅萬象にして然かも陰陽合致の理を示し、一の物體(陽)を現出する時は同時に他の物體(陰)と區別し得べき

他物に對して二となり、此の二物の對照に依て一なる物體を區別し得るものにして、例へば宇宙間に突如として地球なる一の物體の現出する時は、同時に地球を圍繞する空間と區別して、地球なる一の物體を認むるものにして、地球の現出と同時に地球と空間の二物を現はす、此の二者離れて一の地球なる物體を認むる事を得ず、即ち此の二物の合致對照に依て、一の地球なる物體を區別し得るが如く、一個の物體の現出は之と同時に二個の現出を意味するものにして、一の數の生ずると同時に二の數を出し、二物の併合に依て一なる形體を現出區別する事を得べし、即ち零なるものは數



退歩居士曰く  
論理稍繁苛  
に過ぐる嫌  
なきや如何

なるものに對照せるものにして數なき時は零も亦あるべき理なし、語を代へて之を云へば有形なる物體(陽)は無形なる空間(陰)に依て區別し現出するものにして、無形を離れて有形なるものなく、有形を離れて無形なるもの、あるべき理なし、故に數理上、一なるものは二にして不二、不二にして二なる千古不動の眞理を宇宙は吾人に明瞭に教示し説明するものなり。

宇宙は實に微妙なり、空間の中に吾人の肉眼を以て視る事をも得ざる細微なる固形體を包有し、固形體中又吾人の肉眼を以て視る事を得ざる空間を具へ、無形の内に有形を包持し、有形の中に又無形を包有す、宇

退歩居士曰く  
經曰是法住  
法位世間相  
常住此顯  
十住の所顯  
著者首肯せ  
ん哉

宙は實に巧妙なり、何等の軌道を具へずして、蒼々たる大空に彪大なる日月、星辰、地球を包有して、時々刻々に停止する事なく進行せしめて更に誤ることなし、而して活動の地球上に不動靜座せる高山大陸を据へ、或は流動止むことなき海水を湛はし、平然佇立せる樹木を生育せしめ、或は猛然千里を走る動物を現出し、或は茫乎として感覺更になき木石あれば、感慨天を衝く人類を産出す、實に微妙、巧妙共に其の極に達すと云ふべく實に吾人の智識を以ては到底想像し得ざる妙法の二字に歸せざるを得ず、然れとも宇宙は此の妙法の内に吾人に又一定不易の眞理を訓示す、即ち物不動



の中に動あり、動中又不動ある事を現實に吾人に訓示せる事これなり。

一、宇宙は無邊にして、無始無終なることを信ず。

宇宙は此くの如く靈妙不可思議なる活動の中に吾人に千古不易の眞理を明示し、吾人々類も亦宇宙と共に靈妙不可思議なる活動的肉體と精神を有して、此の靈妙不可思議なる、宇宙の現實的活動の眞理に感應自覺する智識を有す、而して吾人々類の靈妙なる精神も肉體も、其本元を探究する時は、素之れ宇宙の活動に依

退歩居士曰く  
宗派に拘束  
せられざる  
人は大抵正  
人の觀念に  
達するも到

て現出せる宇宙の一小分子なり、即ち吾人の精神は之れ宇宙の精神の分子にして、吾人の肉體も亦宇宙の固形體の一分子なり、故に吾人の無形にして靈妙なる精神は吾人より大なる、吾人を包容産出せる絶大にして、無形なる、宇宙の大精神の一小分子なれば、互に相共通感應すべきは理の當さに然るべき所のものにして、吾人の有形なる肉體も宇宙の有形にして、固形なる、物體と同一の性質を具ふるものなるは、宇宙の吾人に現實に教訓せる眞理に照して明瞭に自覺することを得べし、而して吾人の精神の本元なる宇宙の靈妙不可思議なる活動力、即ち大精神は是れ佛教の所謂、佛、基



の如し予思  
ふ佛と神と  
天と其の内  
容必ずしも  
一ならず而  
して其所歸  
の是なる  
不待論

督教の神、儒道の天、にして、各々名稱を異にし、解  
説を違へるも、歸する所、唯一宇宙の靈妙不可思議な  
る大精神を説明するに外ならず。  
抑も、吾人々類の祖先は其の始め如何にして此の地  
球上に湧出し來れるか、人類學者の研究を待つも、理  
化學者に據るも、未だ嘗て其本元を明確に解説して、  
吾人に満足を與へたる學説を聞かず、余は意へらく、  
之れ學説として明解し得ざるこそ當然にして、明解を  
與ふるは不理なり、如何となれば、被作者は爲作者か  
或は之を實見せる第三者に非れば、之を知る事を得さ  
るは三歳の兒童も、尙ほ能く了解し得る道理ならずや

人類自身は已れを作りたるものを知らんと欲すれば、  
人類を作りたるものか或は之を實見せる他物に依て聞  
知するより他に之を知得すべき道なし、現に今や人智  
益々進み、科學の進歩愈々著しく、空中飛行器は發明  
せられて、大空を自由に昇降往來し、電力の應用は海  
上數千里を隔て、尙ほ自由に會話を交換し得る現時に  
於ても、吾人自身は何時如何にして、母の胎内に宿り  
しか、之を父母及び他人より聞知し、自らも實行經驗  
して、之を推理し之を認知するに外ならず、況や太古  
人類の本元は何物に依てか之を確聞する事を得んや、  
嗚呼人類の開元を知らんと欲するものは、地球の創世



宇宙の開闢を知らんと欲するものと同一にして、被作者なる吾人の知得すべき理なし、然らば吾人は此の問題は終に不明に附すべきか、否吾人々類には宇宙の大精神に感應すべき天與の靈妙なる精神を有す、加之吾人は日々に宇宙の活動力を現實に經驗實行しつゝあり故に宇宙の精神と吾人の精神との感應と實見は明に吾人に眞理を信認せしめたり、即ち宇宙の森羅萬象は時々刻々に活動して止む事なく、或は生じ、或は滅し、幾億萬の生靈も無盡に之を生じ、又無量に之を消滅せしむ、其活動力の宏大にして無邊なる、此の動力は人類は愚か、如何なる靈妙不可思議なるものをも湧出し

得べきは、吾人の明確に實見する所にして、一の疑點を挾むべき餘地なし、然れば吾人々類の本元も素是れ宇宙の有形陽無形陰の活動に依て、吾人々類を生したるは事實と推理に依て吾人は明に認識する事を得べし宇宙なるものは有形陽と無形陰とに依て宇宙を組織せるものにして、有形物なき時は宇宙なく無形物なき時も亦宇宙なし、而して如何に變化をなすも無形は何れの時より、何れの時に至るも無形にして、有形も亦何れの時より、何れの時に至るも有形なり、而して有形陽無形陰の交接和合は茲に活動を起して日月を生じ、地球を産み、終に人類を生して、各自に又運轉活動す



退歩士居曰  
開元と終歸  
假説と假説  
生む、殆とを

一四  
而して宇宙間中、尤も靈妙なる吾人々類も、宇宙の眞理と常規に則り、人類陰陽の交接調和に依り、宇宙の活動は又一の吾人を生じ、吾人は又有形なる肉體と、無形なる精神(靈)の一致に依て各自に活動を爲す、而して吾人に精神(靈)と肉體と一致合同する時は活動の物體(靜止安眠するも、血液の循環する時は、之を活動と云ふ)にして、之を生と云ひ、精神(靈)と肉體との一致和合を缺き、相離散する時は、之を死と云ひ、生死の分界は精神(靈)と肉體の離合に依て、之を判別するは何人も現實に確認する所なり、然れども吾人々類は死するも宇宙は決して死すべきものに非ず、即ち吾人は死に就

其の繁瑣に  
堪へず、現  
實の眞實若  
か、世、尙  
の、一、考、識  
歎、歎、著、者  
者、の、著、者  
要、の、著、者  
活、動、の、著、者  
に、無、始、無、終、の、著、者  
説、を、無、始、無、終、の、著、者  
鐵、案、を、無、始、無、終、の、著、者  
信、如、し、る、も、微  
可、な、り、し、る、も、微

くも吾人の精神(靈)は宇宙の大精神(大靈)に歸し、吾人の肉體は宇宙の有形物に化して、宇宙は陰陽合致して、分秒も休止する事なく、時と共に無始無終に活動す、故に吾人は宇宙の存在を認むると共に、宇宙は無邊にして、無始無終なる陰陽和合の大精神(大靈)ある事を信認す。

二、余は中庸は眞理なりと信認す。

「中は天下の大道、庸は天下の定理なり」とは誠に中庸を説明し、眞理を解説して餘りありと云ふべし、中庸は人道の中心を云ふものにして眞理は常に物の中心に



一六  
伏在す、宇宙は陰陽の和合、即ち有形無形の合致に依  
て、宇宙なる活動的現象を吾人に示すものにして、宇  
宙の精神(靈)は宇宙の陰陽の和合調和の中に伏在す、而  
して其調和する所、即ち宇宙の中心は即ち眞理なり、  
公道なり、定理なり、見よ日月は中心を失せざるが故  
に大空に懸りて晏如たり、地球は其中心を失せざるが  
故に日夜宇宙を廻轉して平然たり、天下萬物其中心を  
失せざれば整然として各其所を得、中心を失すれば忽  
ち何れにか傾向轉倒す、人類も亦宇宙の一物體として、  
此の理に背叛する事を得ず、吾人の肉體は其重量に於  
て中心を失する時は忽ち地上に轉倒し吾人の精神一朝

中心を失する時は、亂心、放慢、憤怒、煩悶、憂苦、失  
意等の狂態を演じ、常識を逸し、人道を蹂躪、横斷す  
るに至る、故に一家中心を失すれば、家政亂れて破産  
の悲境に陥り、一國中心を失すれば、人心離散し、國  
政亂れて内亂を生じ、國交中心を失すれば、外交忽ち  
破れて、戦端立所に開け、砲煙彈雨は幾千萬の軍隊を  
鑿にするの悲惨を演ずるに至る、是れ中心は萬物眞理  
の伏在する所にして、宇宙の公道定理なればなり、然  
れども孔子の所謂「中庸を行ふ事、夫れ堅い哉」と云へ  
る如く、人事多くは中心即ち中庸を保つ事を得ずして、  
戦争、衝突、争奪、訴訟、盜賊、詐偽、欺亡、憤怒、煩

退歩居士曰く  
奇なる哉一  
切衆生如來  
の徳相を具



足せり、難事  
にあらす、  
飢來、心  
茶平、常  
道なる事  
知るべし

一八  
悶、嫉妬、憂苦、殺人、自殺、等の罪惡の滅絶する事  
なし、嗚呼日月は常に中心を保ち、地球も亦中心公道  
を歩みつゝ、吾人に眞理を示し、平和を勸む、然るに吾  
人々類は中心を失し、中庸を誤る事の多き、實に悲ま  
ざるを得んや、吾人々類は日夜送迎する複雑なる人事  
に對し、各々中心を保ち、中庸を得る事甚だ難しと雖  
も、此の眞理を信じ、孜々として中庸に従はん事を努  
むれば、尠くとも罪惡を減少し、平和なる文明的良民  
たる事を得ん。

三、余は凡て平等無差別にして、然も區

別階級制度ある事を信ず。

宇宙に存在する凡ての物體は有形無形に拘らず、形體  
の大小も、容貌の醜美も、力の強弱も、智識の賢愚も  
種類の如何なるものも、皆是れ均しく平等なる宇宙の  
同一物質、同一物體の分子にして形體にも精神にも宇  
宙の前には何等の差等階級のあるべき理なし、故に余  
は宇宙の萬物は有形なる物體も、無形なる精神も、宇  
宙の一物體として歸する所其本元は同一なるが故に凡  
て平等にして無差別なりと信認す、然れども宇宙の物  
體は大は天地に照臨する日月 及び海陸を擁して廻轉



足せり、事難  
事も亦、事難  
にあらす、事難  
飢來、飯渴、來  
茶平、常心、來  
道なる事、是  
知るべし、

悶、嫉妬、憂苦、殺人、自殺、等の罪惡の滅絶する事なし、嗚呼日月は常に中心を保ち、地球も亦中心公道を歩みつゝ、吾人に眞理を示し、平和を勧む、然るに吾人々類は中心を失し、中庸を誤る事の多き、實に悲まざるを得んや、吾人々類は日夜送迎する複雑なる人事に對し、各々中心を保ち、中庸を得る事甚だ難しと雖も、此の眞理を信じ、孜々として中庸に従はん事を努むれば、尠くとも罪惡を減少し、平和なる文明的良民たる事を得ん。

三、余は凡て平等無差別にして、然も區

別階級制度ある事を信ず。

宇宙に存在する凡ての物體は有形無形に拘らず、形體の大小も、容貌の醜美も、力の強弱も、智識の賢愚も種類の如何なるものも、皆是れ均しく平等なる宇宙の同一物質、同一物體の分子にして形體にも精神にも宇宙の前には何等の差等階級のあるべき理なし、故に余は宇宙の萬物は有形なる物體も、無形なる精神も、宇宙の一物體として歸する所其本元は同一なるが故に凡て平等にして無差別なりと信認す、然れども宇宙の物體は大は天地に照臨する日月及び海陸を擁して廻轉



自在なる地球より、小は吾人の肉體を以て視る事を得ざる細微なる塵埃に至るまで、苟も形體を備ふるものは自ら一定の限界あり、空間其間に挟まれて甲乙彼此互に其の區別なかるべからず、物既に區別ある時は、物體と物體と相對照比較して大小、強弱、智愚、種類に於て各自に差等なかるべからず、(宇宙に對しては同一物體にして何等の區別差等なきも物と物との對照に於て區別差等あり)既に差等を生ず、此に於てか又階級なかるべからず、既に階級あり、然らば之を統轄、治定して其所を得せしめ其天職を守らしむべき制度方法なかるべからず、視よ宇宙は宇宙を統轄すべき制度を

設けて天は日月、星辰、地球より、小は山川、草木、人類、魚鳥、蟲類等の如何なるものに至るまでも、各自其天職を與へて運轉活動し、或は盛衰、或は生死、或は運命等己が權威に屬すべき制度は必ず之を守らしめ、必ず之を實行せしめて規律整然、一も之を犯す事を許さず、各自に天職を遵守せしめて以て之を統轄するに非ずや、是れ宇宙は吾人に其模範を示し且つ教訓を與ふるものなり、左れば地球上生存する幾千億の吾人々類も大は地球上、洲、國の別より、小は個人として男女の別あり、大小の別あり、強弱の別あり、貧富の別あり、貴賤の別あり、長幼の別あり、醜美の別あり







兒或は變體を出す事あるも必ず其原因あり敢て謬る事なし、人事百般亦此の理に依り、善因は必ず善果を生じ、惡因は必ず惡果を産み、原因小なれば結果又小に原因深大なれば結果も亦從て深大なり、佛教の所謂因縁因果は能く此の眞理を解説せり、吾人は此の眞理を了解服膺して己が言動行爲より思想念慮迄も慎まざるを得ず、然るに人若し公德を犯し徳義を没却し、他人を偽り己が良心を欺く如き罪惡を犯すものあらんか、是れが爲に他人に不慮の損害を蒙らしむる如き惡果を生じ、此の惡果は又惡因をなして循環終に己れに惡果の廻り來るは到底免るる事を得ざる一定の巡路なり經

路なり又眞理なり、然るに人事百般の事件は複雑にして循環轉輾し來るものなれば、原因と結果を直に見る事を得ざる事件ある爲に或は一時の慾望に驅られ、或は萬一にも此の經路を免るべき希望を以て諸種の罪惡を犯し、良心の呵責を受けつゝ外面恬然として耻づる事なきは、實に無謀淺慮愚味の極にして將來何れの時にか必ず惡果を生じ煩悶、懊惱悔ゆるも及ばざる時機の來るべきは數理上免るべからざる巡路なり、吾人は之を事實に徴するに原因直に結果を生ずる時は其結果は比較的に小なりと雖も時日を経過する程結果は深大なり、即ち假に他人を殺害せる罪禍を犯せるものあり



退歩居士曰く  
深信因果の  
際、信を實  
に示す際  
に、極め  
る所、極  
めたる所  
に、原因  
を計算す  
るに、差  
引計算者  
成語に始  
めて、言  
ひて、妙  
極めたる  
妙

二六  
て數十年の久しきに涉りて露れざるものありとせんか  
此の間に於ける刑罰を免れんとする苦心、懊惱、煩悶  
は如何に、或は殺害せられたる苦難よりも大なる苦心  
を爲し、然して終に最後に至りて犯罪發覺して當然の  
刑罰を受けざるを得ざるが如きは吾人の日々に見聞す  
る處なり、惡因の惡果を生ずること既に此くの如し、  
善因の善果を生ずるも亦此の巡路を脱する事なし、人  
或は云はん、余は善良にして人道を守り、慈善心厚く  
して他人に恩澤を施し常に善根を積むも不幸にも災害  
多くして常に貧困に苦しみ善果の酬ひ來る事なしと、  
是れ又淺慮にして人事の眞髓を解せざる人の言なり、

結果の己れに來れる時は原因と結果の差引計算を決濟  
する時にして因果の消滅の時機なり、故に善因にして永  
く善果の來らざるは他日大なる善果の廻り來るべきも  
のにして、己れ一世に善果の來らざる時は他日子孫に餘  
澤を生じて終に大なる差引計算を了するものなり、而し  
て不幸災害の襲來するは或は自己の不注意により、或  
は免るべからざる自己の運命に遭遇せるものにして、  
自己の爲せる善因と其經路を異にせるものなり。

吾人は如上因果の理を確信して寤寐にも忘るゝ事なく  
勤勉力行善良なる原因を行ふ事に勤むれば、心恒に平  
安にして富貴を羨まず貧賤を悲まず、災害も亦恐るゝ



退歩居士曰、運命とは、物變遷の相、狀なり、予は、著命が幸に宿命説に陥らざりしに、若し喜ぶ人、とを喜ぶ人の運命に、想斯の、する時に、諷、の二句を、して、偏狹な、る悲觀を、免、るは、亦、山、上、幸、なり、

に足らず、而して吾人は清廉高潔にして、然も愉快なる生涯を得べし。

二八

### 五、余は運命の存在を信認す。

抑も運なる語は動の意義を舍むものにして、轉輪、流轉、移轉等物の運轉移動を意味する語にして運命なるものは、天の定まれる運動、即ち宇宙の活動之を吾人は運命、天命、又は天運と云ふ。

宇宙の萬物皆宇宙の活動に依て現出生存し、又宇宙の活動に依て變化消滅す、彼の天變地異の如き、動植物の生死の如き、宇宙の活動に屬する運動は、吾人々類

有山、山、萬、路、縱、橫、無、路、

の左右し得べきものに非ず、又制止し得べきものに非ず、之れ即ち天運に非ずして何ぞや、運命に非ずして何ぞや、見よ吾人々類の命數の如き蒲柳の身にして百歳の壽を保つものあれば、強健鬼神を撃く猛者の早世するものあり、功名富貴一世を凌駕する貴族富豪の家に生るゝもあれば、貧賤にして軒下に食を求むる乞丐の内に生るゝものあり、強壯肥大健剛なる身體を以て生るゝものあれば、生れながらにして病弱不具者あり、天質美貌幾多の男子を惱殺せしむる窈窕たる美人に生るゝものあれば、生れながらにして醜惡、奇形、鬼女の如き婦人あり、伶俐、敏捷、神童と呼ばるゝ天才を



供へて生るゝものあれば、生れながらにして瘋癲、白痴、自ら衣食を爲す能はざるものあり、千差萬別、千變萬化、一として同一運命を帯びて生るゝものなし、人の顔貌の異なるが如く、人心又同じからずして運命も亦同じからず、人或は云ふ人類生れながらにして貴賤、貧富、強弱、醜美等運命の差等あるは、天の平等の理に反し、天の配劑甚だ不公平なりと、是れ實に淺薄、未だ宇宙の眞理を解せざる言のみ、余は前頃にて論述せる如く、萬物皆實質に於て平等無差別なるも形體に於て既に個々別々の區別ある時は必ず物と物との比較階級を生ずるものにして、階級は即ち直に運命

を區別せるものなり、寸毫も違はざる平等は同一物體のものに非れば之を得る事を得ず、吾人既に男女の別あり、長幼の別あり、生存死亡の時機又異なり、意識感應も亦異なり、如何にして同一平等の運命を與ふる事を得んや、故に物既に區別ある時は運命も自ら異なるべきは眞理にして同一なるは無理なり、然れども宇宙は又平等なり吾人に靈妙なる精神を與へて感應の如何に依て幸も不幸に感じ、不幸も亦幸に感ずる事を得べし、即ち吾人の悲哀を感じ、快樂を感ずる程度は上下、貧富、長幼、男女、智愚、強弱の別なし、是れ萬物平等にして差別あり、差別ありて然も平等なる巧妙



微妙の眞理の存する所なり。

六、余は運命を信ずると共に各自天職を發揮し職分を守るべきものと信ず。

吾人は肉體と精神を有す、而して肉體と精神の一致は必ず吾人は活動を要求す、故に活動は吾人の天職なり、職分なり、吾人は母の胎内を出で、呱呱の聲を擧げてより、墳墓の下に眠る迄天職を有す、宇宙の活動は吾人に運命を與へられたり、從て此の運命を保持し善用し、完全に發揮すべき活動的天職を賦與せられたり、即ち吾人は自己の身體を完全に發育せしめ、凡ての經

退歩居士曰く  
佛陀は衆生を  
一切の業所感  
を共に業とゆ  
なり共業とゆ  
然り共業とゆ  
は人類共業と  
の共同の業と  
の共同の業と  
業に依りて其  
中一人に大族  
を一人に大族  
を一人に大族  
眼著健の著

驗に依て智識を練磨し時と共に進歩發達せしめて、小は一身一家より大は弘く國家社會の爲めに最善の方法と最善の道に依り一生を擧げて天職を盡し、天壽を完ふすべき義務を有す。

人類は男女の集合に依て人類を生ず、故に人類は集合性のもので、個人性のものであらず、故に天職も亦個人的に非ずして集合的、公共的ならざるべからず、即ち天職は自己の爲めに盡せるを以て足れりとすべからず、必ず自己及び他人の爲めに善良なる利益を増進せしむるものならざるべからず、サー、ウォーター、スコット氏曰く、若し此の世界にして互に助くる事なき



に至らば人類は消滅すべし、慈母が其軟かき腕を愛兒の枕にあてがふ時より、死に瀕したる老人の雙眼を蔽へる濛氣を或は懇切なる手が拭ひ去る時まで我等が相互の援助なくして存在する能はざるなり、されば援助を要する人は何時にても其同胞に向て之を求むる權利を有し、而して他人を援助する力あるものは誰人と雖も此の要求を斥くる能はざるなり」と實に然り集合性たる人類社會は相互の援助に依て社會を象るものなれば援助は即ち天職なり、然れども亦援助を求むるは天職に非ず、互に援助を與ふるを以て天職とすべき事を忘るべからず。

吾人は運命の下に生れ、運命の下に生存し、運命の下に死去すべし、然れども吾人は天職を忘れ遊惰、放逸爲す事なくして一生を運命に委ぬて終らんとするものは己が運命を毀損し、己が運命を雲散霧消せんとするものにして、好んで不幸死地に入らんとするものと敢て異なることなし、宇宙は吾人に運命と共に活動的天職を與へられたり、故に吾人は活動は天性にして制止せんとして制止し得べきものに非ず、只之を善用する時は運命と併行し、悪用する時は運命と逆行する事を忘るべからず。



七、集合性たる人類の集合團體には團體  
自身の精神の存在を信ず。

宇宙の萬物は集合性なり、故に人類も亦集合性なり、吾人々類は陰陽の活動即ち男、女の集合に依て生じ、又母に依て教育せられ、又自ら父母となりて子女を養育し同棲せんことを希望す、是れ人類は天性集合的性質を有するが故なり、而して集合には必ず共通の精神あり、一家にも一國にも、團體にも、法人にも、苟も集合を爲すもの、凡ては必ず何物か目的ある共通の精神を有す、此の集合の精神を個人の精神に比較するに

集合の多數なるだけ其精神も亦多大にして尊重すべきものなり、故に個人の精神よりも一家の精神は重く、一家の精神よりも團體法人の精神は更に重く、團體法人の精神よりも一國の精神は一層重大なり。

吾人の肉體は吾人の主宰者たる精神の命令に服従して其運用を爲すものにして、精神と肉體と一致の運用は即ち吾人の活動なり、然るに若し自己の精神の命令に服従せざる肉體の運動ある時は、是れ即ち塵埃の風力に依て浮動せる如く無意味なる他動にして、自己の活動に非ず、合理の動作に非ず、人類集合團體に於ても亦然り、一家にも一家共通の公精神ありて家主は其精



神を代表して之が主宰者となり、一國には一國共通の公精神ありて君主は之を代表して主権者となり、家族は家主の命令に服従して活動し、國民は君主の命令に服従して活動し、初めて集合團體の目的を達し國家の安寧、秩序を保持し得べきものなり、若しも家族にして家主の命令に服従せず、國民にして君主の命令に違背するものある時は既に己に集合の精神に異狀を來せるものなれば、必ずや其家亂れ、其國亡ぶ、之に反して明君出で、臣民の心を以て意とし、最善なる公精神を以て輿論の歸する所を慮り、臣民を愛撫し、國政を料理する時は國民は安全に天職を發揮し、忠君愛國の

退歩居士曰く  
所説平凡なく  
るが故に危  
嶮の分子を  
含まず可欣

信念厚く、國威海外に徧く、國光四隣に輝き、國家の安全幸福期せずして來る、若し又賢主ありて一家の安全幸福を増進すべき主義と精神とを以て家人を愛育扶掖して家政を施す時は、家人は家主を敬愛して各自勤勉誠實に其職分を守り、家名益々騰り一家の富貴繁榮云はずして明なり、吾人は吾人の精神吾人の主義を貫徹せしめんとする時は吾人の肉體は爲に危險に會し艱難を忍ぶも之が實行に努むる如く、集合團體の精神即ち其主義目的の爲には、個人は一身を犠牲に供して之と闘はざるを得ず、即ち外交破れ、國交斷絶して一朝戰宜の布告出づる時は、國民は祖國の主義精神を貫徹



せしめん爲に、個人の生命財産を擧げて國家に供し、死力を盡して戰鬥に従事すべきは國民當然の義務にして、之れ集合性たる吾人々類の道なり。

四〇

世に國家主義と個人主義との別ありて兩者各々自説を眞理なりとして鎬を削りて論義し、共に利害相容れざるが如き觀あれども、之れ大なる誤謬にして、最善なる國家主義は、最善なる個人主義と一致して更に目的に於て異なる所なし、即ち國家は個人より組織されたるものにして、個人は又人類集合性なる天性により國家を組織して、各自の大なる安寧秩序を保持するものなれば、兩説共に其奧義を窮め、眞理の伏在せる中心

點に到着する時は、共に同一主義に歸すべきは明なり。

國家と個人否凡ての集合團體と一私人とは利害相反するものに非ずして、必ず共通共益の公道あり、上下此の公道を歩む時は共に安寧幸福を共有すべし、吾人は個人として如何に富貴光榮の地位に達するも、我家廢れて家族離散し、我國亡びて我同胞饑に泣く時は、吾人の光榮何所にかある、吾人の富貴何に依て保持する事を得ん、吾人は公道を歩み公益を増進するは集合性たる吾人の天職なり、吾人は天職を守り、本領を發揮すれば富貴自ら來り光榮期せずして吾人の頭上に輝か



ん。

退て我國の狀態を考ふるに日清、日露の如き、戦時に在ては上下一致して武士道を發揮し、大和魂は到る處に活躍し、我國の眞精神は一大活動をなして壯觀を極めたり、然れども吾人は怪む、一朝干戈治り平時に復する時は、悪性なる個人主義は一國を風靡し、公職にある議員にして醜惡なる破廉耻罪を犯し、公共事業に従事する會社重役にして公務を疎外して私腹を肥し、公職を忘れて私慾を逞ふし、罪禍は終に酬ひ來りて囹圄の中に呻吟するもの續々として絶えざるが如き、殆んと戦時の状態と正反對の感あるは、吾人は我國將來の

爲め實に痛歎に堪へず、今にして國民各自に自覺して公德を發揚し、徳義を振興せしめ、公道を歩まざれば終に國威を失墜し、國力を減殺するに至るべし。

### 八、人世の行路は難易、悲樂の中道を歩

むべきものなり。

宇宙は時と共に常に活動せり、故に吾人々世の行路も活動して、波瀾の止む時なし、吾人は現世に生れて、墳墓の下に眠るまで、如何なる人も皆此の波瀾と闘はざるを得ず、吾人は如何にして此の波瀾多き行路を歩むべきか、水泳の秘術は身體の中心を失はず、身體を

退歩居士曰く  
予未だ著者  
と一面識の  
榮を得ず、  
隨て著者の  
人格を審み  
せんと雖も  
此章を通  
讀するに、  
恐く著者の  
人格と経験  
とを自問自



答せりと認  
めらる、如  
何、著考首  
肯、著考首  
否、敬服や

四四

波浪の高下に委ね、迫かず急かず、心を静にして敢て波浪を虞れず、而も四肢の動作を怠ることなくば、必ず目的の彼岸に到着することを得べし、人世の行路も亦水泳術と敢て異なることなし、吾人は宇宙の活動に依て生れ、宇宙の活動と共に歩み、宇宙の活動に従て死に歸す、左れば吾人は此の風浪多き人世に處しては、吾人は誠實中庸を守りて凡て中心軌道を脱せず、時勢の變遷と大勢の如何を觀察し、敢て富貴功名の爲に成功を急がず、如何なる艱難災害の襲來するも、一難來る毎に勇氣百倍の慨を以て艱難を虞れず災害に耐へ、屈せず撓まず、己が天職を守りて寸時も怠るゝなく、

斯くして自己の天職を完ふするを得ば、自己に與へられたる運命だけは發揚することを得ん、之れに反して大勢に反抗し、逆流に遡るは一見勇猛にして甚だ壯快なるか如しと雖も、爲に自己の進路に障害を來し、自己の目的を達することを得ざるに到り終に自己の天職をも發揮することを得ず、従て社會にも國家にも何等の貢獻すること能はざるに至る、是れ吾人は其天職を曠くするものと云はざるべからず、古人の訓に「人世の行路は重き荷を負ふて遠き山路を歩むが如し」と云へるは人世の行路は困難を以て常態と覺悟すべきことを吾人に示したる好訓戒なり、吾人は生れて人世の行路



に出發せる幼年時代は、父母の保護の下に歩むものなれば左程行路の困難を感ぜざるも、青年時代に達し、父母の保護を離れ、始めて孤立獨歩の旅路を歩むに至りて種々の意外なる艱難辛苦を實見すべし、或は急流なる河川に到着して渡るに船なきことあらん、或は思はず迷路に彷徨して終に歩むべき路を失ひ、再び元來し路を見出すに困難する事もあらん、或は夜中峻坂にかけり宿泊すべき宿もなく夜を徹して難所を跋涉することもあらん、或は平坦堵の如き大路を歩み、風光明媚絶佳なる景色を眺めつゝ歩むこともあらん、而して天候にも亦暴風暴雨歩行に堪へざるの日もあるべし、或

は炎熱金石をも溶す日もあるべし、或は寒威凜然、肌を刺すの日もあるべし、或は春風飈蕩、百花爛熳の日もあるべし、人世の旅程には必ず何人か同伴すべき家人ありて、或は旅中病魔に犯さるゝこともあり、或は旅中不幸にして賊難に遭遇して旅費に窮することもあり、或は同伴者中有用なるものに死に別かるゝこともあり、千態萬狀誠に意想外のことのみ多く其艱難實に名狀すべからず、此に於て世人或は此の行路の困難を追想して人世の悲觀説出で、厭世の感を起すものありて、其極自殺を企つるものあるに至る、或は又極端なる悲觀厭世の反對に極端なる樂觀説を主張し、人世



は左程困難なるものに非ず、人世の觀察は自己の感想如何に依り、何れとも觀察し得べきものなれば、人事百般凡てを樂觀し天運に委して一も注意を拂ふ事なく、暴慢、放逸、常識を逸し、軌道を離れ寸毫も非常に供ふる用意と覺悟を爲さざる人あり、此の如き人にして若し一朝不慮の災害に遭遇するか、或は意外なる變事に逢ふ時は、恰も暴風に吹き流されて、大洋に漂ふ小舟の如く、己れを忘れて狼狽し、動哭悲泣忽ち極端なる悲觀論者と化し去るか、或は又幸ひに剛毅沈勇尙ほ樂觀して從客として死地に就くものありとするも、爲に同伴者たる家族をして憐むべき不幸を蒙らしめて、

悲嘆の淵に沈溺せしむるは往々吾人の見る所なり、是れ悲觀樂觀共に極端に馳て中庸を失し、常軌を脱したるものにして人世の解釋を謬りたるものと云ふべし。人世の行路は實に複雑にして、單調のものに非ず、季節に四季の別あるが如く、天候に晴雨の日あるが如く、苦樂盛衰は常に波狀を呈して動搖循環す、故に苦樂盛衰は物に表裏あるが如く、鳥の雌雄あるが如く、天地陰陽の理にして離隔すべきものに非ず、即ち苦は樂の因を爲し、樂は苦の因と成り、互に因果を生じて常に循環交代するものなれば、人世を悲樂何れか一方に觀察せんとするものは片言以て訴を斷する隻眼の徒のみ、



吾人は苦に居て樂を思ひ、樂に居て苦を忘るゝことな  
くば人世の行路自ら眞理に近き中道を歩み、吾人の行  
動從て中正を保持することを得ん。

五〇

九、吾人は現在の状態に満足して將來に

大なる希望を懐かざるべからず。

吾人の慾望は無限なり、而して吾人の生命に限あり、  
何れの時にか満足の時來らん、唯己れが内心に於て、  
現在の境遇は現在に於て満足なりと信ずる時は、何時  
にても、如何なる境遇にても満足して愉快に其職分を  
盡す事を得べし、孔子の所謂「以不足是知足矣」との言は

實に千古不易の金言なり、人或は他人の境遇を羨望し、  
彼等は幸福にして意外なる名譽と富貴の地位を占め、  
身は金殿玉樓に住し、酒池肉林、左右に美人を擁し日  
夜觀樂飽くことを知らず、必ずや充分なる満足を得て  
些の不足なからんと、焉ぞ知らん彼れ等は此の觀樂に  
不足を感じ、日夜他の樂の方法に苦心し、終には其觀  
樂に飽きて又他人の觀樂を羨望す、若し又假りに此の  
觀樂を以て満足せんとせば、自己の命數の日々に減少  
するを憂ひ、尙ほ己が子孫にも此の幸福と觀樂とを繼  
續せしめんことを希ふが如き、妄想を描いて猶且つ不  
足を感じ、終には元の不満不足の時を羨むに至る、之



れ物極まれば必ず變ずるものにして、所謂滿缺の原理により、満足は常に不満を伴ひ來るものなり。

満足は快樂なり、不満不足は不快なり、而して吾人は常に快樂を希望す、快樂は吾人の健康を援け、不快は吾人の健康を害す、然るに吾人は不満の事多く不足を感じる事甚た少しとせず、從て愉快の日は少く不快の日は多し、吾人の希望する快樂は如何にして之を求むべきか、吾人は如何に不満を啣ち不平を啣つも益己れを沈鬱ならしむるのみにして更に快樂を得ることなく、又何等の益する所なし、然れば吾人は現在の不満の状態は吾人の以前に造れる原因の巡り來りて現時

退歩居士曰く  
著者の平生  
を見るに亦  
此の文章の

如けん、此  
の氣概ある  
もの苦樂を  
一申して  
「言問ひ團  
子」の如く  
「去らんく  
眞に男兒の  
本領」

其結果を實行しつゝ、ある時なれば、是れ吾人今日當然の責務なりと信じ、現時の状態を甘受し、愉快に正直に己が職分を盡し、進んで天職を發揮せば、吾人の將來に一層大なる快樂多き事柄の來るべきは火を睹るよりも明なり、斯くてこそ、吾人は不満の中に満足し、不快の内に愉快に日常の勤務に服することを得ん、然れども若し吾人は今日の状態に満足するも、小成に安んじ、遊情怠慢社會に何等の貢獻することなく、天職を曠ふするものありとせんか、之れ進歩すべき社會を害し國家を毒する鼠賊なり、吾人は鼓を鳴して之を撲滅せざるべからず。



④ 慈愛は人類の調和濟にして集合の連鎖なり

動物は凡て陰陽異性の集合に因て生ず、故に動物の集合を好むは天性なり、吾人は人類に於て特に然るを観る、而して集合は常に慈愛に依て聯結さるゝものにして、慈愛は集合の調和濟なり、故に慈愛なき集合は意志の疎通なく、團結の力なし、蓋し意志の疎通なく、團結の力なき集合は死せる集合にして活動の集合に非ず、即ち集合の目的に反す。

夫れ人類は男女異性の戀愛に因て生じ、親子、兄弟

退歩居士曰く

「通篇一種の戀愛説なり、亦可なり、男の情を女の情に、女の情を男の情に、あらず、善く物を悟る心、れを悟る心、心者大慈悲佛、是れなり、聖語を布演の、したるを此、章の大意と、觀るへし、著者造詣の、深きを知る」

は慈愛に育てられ、茲に一家なる結合團體起り、一家結合して終に一國をなす、而して集合團體には慈愛、戀愛の深厚なる丈け結合力も亦從て強固なり、之に反して慈愛、戀愛尠きものは從て結合力も亦薄弱なり、即ち慈愛、戀愛の分量の多寡は結合力の分量の強弱を示すものなり。

吾人は之を事實に徴するに、我國古來外國に比し、國狹小にして人口從て少數、富力劣等にして、個人の力又比較的虛弱なりと雖も、強大なる露清に打勝ち、世界に名聲を博せるは、一に我國民の誠忠愛國の資性、外國より比較的強厚なるによらずんばあらず、即ち叡



聖文武なる我 天皇陛下は、神代の古より皇統連綿として皇土に降臨し玉ひ、常に臣民の心を以て意とし、撫愛至らざるなく、我臣民も亦古より忠君愛國の念厚く、君命の爲には死は鴻毛よりも軽く、事苟も國威に關する時は國民舉げて事に従ひ、一致團結力の強固なる、世界其比を觀ず、是れ法律規定の力によるに非ずして、一に集合團體の連鎖なる慈愛の力の強大なるに外ならざる好實例なり。

釋迦、基督、孔子の如き、我等人類の中、最も尊重すへき千古の教訓を垂れ、且つ之を實行されたる彼等は、自覺安心立命を以て満足せず、其一世を慈愛の爲

に捧げ、其一身を犠牲に供じ、千艱萬苦を犯して、衆生の濟度に盡瘁したる爲め、彼等の弘大なる餘澤は日々に盛にして今尙ほ減ぜず、彼等在世の當時より今日に至るまで爾來數千年間、幾百千萬の民衆は彼等の弟子となり、門弟となりて、其教義を信仰し、其訓戒を遵奉し、依て以て自己の安心立命を得たる、皆是れ彼等の慈愛の力ならざるはなし、視よ一令の下に幾百萬の軍隊を動かし、威風堂々歐洲を風靡せる「ナポレオン」の如き、又身は匹夫より出で、位人臣を極め、國威を海外に轟せる豊太閤の如き、其他英雄豪傑として尊重畏敬せられ歴史に特筆大書せられたる人傑少からずと



雖も、彼等の如く今に至るまで多くの尊敬を受け、弘く崇拜せらるゝものあらず、之れ神靈上に關すると形體上に關するとの別あるに依ると雖も、又永久なる慈愛心の遠く彼等に及ばざるに因らずんばあらず、嗚呼慈愛の力實に偉大なりと云ふべきなり、此に於てか余は思へらく自ら眞理なり、公道なり、至誠なりと信する道は自ら之を信じ之を歩むは當然の事なりと雖も、他人に其樂を別ち、之を傳へ、之を信ぜしめざる限りは、獨り自ら樂しむに過ぎずして衆と共に樂しむものに非ず、即ち高潔なる慈愛の念を缺くものにして集合性たる人類の公道に違叛するものなり、故に吾人は公

正なる神、理、道を歩み、吾人の天職を守り、日々に自他の利益の増進を計るべきは人類當然の義務にして、尙竿頭一步を進めて慈愛心を發起し、己が家族は勿論、知己、友人より、弘く社會の民衆に迄も慈愛を施すべきは吾人の本務なり、然るに吾人は怪しむ、現時我國民中、然かも身は社會上流の地位を占め、自ら大厦高樓に住し、華美を競ひ豪華を極め、世人より貴顯紳士として尊敬を拂はれながら、慈愛の心は唯一の家族に偏し、知己友人にすら之を施すことなきのみならず、己れ自身は先輩の慈愛により今日の地位を得たるを忘れ、後輩を誘掖扶助することをなさず、己れ自らは物質



上の慾望をのみ逞ふせんとするものあるは、實に國家の賊にして此種人類の日に多きを加ふるは終に國力の減少を來す所以にして、實に吾人の慨嘆に堪へざる所なり、己れは既に國家の功績を擧げたり、國家的事業は既に成功せりとて未だ其本分を盡せるものにあらず、尙己れ以上の有用なる人物を後輩者より多く養成して、益々國家民衆の爲めに、永遠に利益の増進を計るべき責任は己れの地位の高き丈けより多くの責任を負擔せることを忘るべからず、嗚呼、現時の貴顯紳士は口に人道を唱へて之を實行することの少なき吾人は實に痛嘆に堪へざるなり。

### 結 論

宇宙の解釋、人世の見解、其中心を捕へて之を論ずるときは甚だ明瞭にして、其中庸を得れば實に簡明的確なり、然れども宇宙の森羅萬象、人世の千變萬化、複雑の事件に對し、吾人の智識を以て限りなき有形無形の事態を研究せんとするときは、迷霧の爲に中心を失ひ、疑惑の爲に中庸を忘れ、終には不可思議にして不明なりとの一言を以て迷夢の中に彷徨するに至る、古より諸種の哲學者出で、一生を此の研究に捧けたるもの數ふるに暇あらずと雖も、的確明瞭なる解決を與へたる

退去居士曰く  
一、圖、壽、當、年、  
愛、洞、庭、波、  
心、七、二、峯、  
青、思、如、今、高、  
臥、思、前、事、  
添、得、廬、公、倚、  
石、屏、偈、雪、竇、  
の、一、偈、を、錄、  
し、て、結、論、の、  
評、と、せ、ん、  
乎、と、



もの幾人がある、之れ多くは極端に走て中心を失ひ、熱心に過ぎて中庸を謬りたるが爲に外ならず、故に吾人は此の事を研究せんとするに際して、先づ自ら冷靜無我の境に入り、中心は眞理なりとの確信を以て、直覺的に有形無形の中心を護得するを力めざるべからず、かくすれば濶然として自覺する所あるべし、而して此の確信に依て中庸を失はず、宇宙を下觀する時は、人は愚か雄大なる宇宙の物體も甚だ簡單明瞭に解決せらるるゝを得べし、故に吾人は此の問題は不可思議にいて、不可思議に非ずと斷定するものなり。

宇宙の活動、即ち神靈は之を認知すること甚だ平易

にいて、智者も愚者も平等に之を信認することを得べし、蓋し眞理は宇宙間凡ての物體に共通公有するものなればなり、然れども疑心を以て之を研究せんとするときは、疑心は又疑心を産み、終に中心を失して不明の境に入り、迷霧の内に隠る、如何となれば己れ自ら宇宙の一物體にして現實に宇宙の活動の内に棲息するものなれば之を信認すること甚だ易しと雖も、自らの現在を疑ひ、限りある小なる自己の力に依て、殆んど對比すべからざる絶大の力ある宇宙の凡てを、自己本位に解釋せんとする如きは、既に本末を誤り、數理の原則に違背するものなれば、何れの時に至るも解決の



時なかるべし、故に吾人は自己と宇宙の活動、即ち神靈と一の隔てなく、交接一致するときには、容易に神靈を確信することを得べきものなりと信ず。

眞理は物の中心にして物の眞髓なり、公道なり、故に中心を獲得すれば、人世も容易に解決し、宇宙も透明に観察し、自ら眞理を歩むことを得べし、之に反して中心を失すれば萬物皆迷霧と疑心に蔽はれ、人世の解釋も亦甚だ難澁なり、如何となれば中心は全力の集注する所にして且つ分岐の平分點なればなり、然るに吾人多くは極端を好み、中心眞理を熱心に搜索して思はず一方の極端に驅て終に目的の中心を失す、故に又

必ず他の極端の説出で、常に之に反對し兩々相對峙して謬論を以て誤説と闘ひ、討論終決の時なく、眞理と益々隔離するに至る、例は吾人は紛失物を搜索するに當て餘り熱心の度を過す時は目的物の眼下に存在するを忘れ、反て他方に向て熱心に搜索するが如し、是れ頭腦の冷靜ならざるが故なり、即ち自ら心の中心を失するが故なり、左れば人事に於ても、己が一定の主義信仰なき人は、己れ一身の中心を失するものなれば、事に當り、物に接して、迷霧と疑雲の爲に確信なく、勇氣なく、斷行の力なく、從て自他の損害尠少なからべし。



吾人は如上の眞理を確信して、宇宙を解釋し、人世を觀察するものなり、故に宇宙の活動、即ち神靈と一致し眞理に依て公道を歩み、至誠以て天職を守り、現在の状態に満足して將來自他の利益をより多く増進せしめ、己れ獨り樂む事なく衆と共に樂しみを共有し、尙進んでは、慈愛の爲に己が家人より知己友人に及びし延ひて社會を勧誘して共に此の公道を歩まんことを希ふ、これ蓋し集合性たる人類の必要なる慈愛心なればなり、又人類の義務なればなり。

然れども言ふ事は易く、之を行ふこと甚だ難し、古より道を説く人多くして、之を實行する人の尠きは誠

に故ある哉、故に吾人は此の確信を冷却せしめず、眞理、公道を窮行實踐せんことを期せんが爲めには、日に三省は愚か、常時不斷に反省せざる可からず、かくする時は假令人世の萬事に適用して、凡て誤りなからしむること甚だ困難なりと雖も、少くとも日々に罪惡の幾分を減じて神靈に近づき、終には良民の一たることを得ん乎、之れ余が終生の希望として又余が人世に於ける責任なり、本務なりと信ずるところのものなり。

余や淺學菲才、加ふるに日々の商業に營々たるもの此の如き人生の大問題を解決せんこと素より其任にあらず、然れども何故に人生に生れ、如何なる目的を以



て如何なることを爲すべきかは、吾人々類が了得し置かざるべからざる必要重大なる問題なり、茲に於て余は自ら其任に非るをも顧みず、沈思黙考無我の境に入り、直覺的に眞理なりと確信せる主義信仰の大綱を記述すること此の如し。

明治四拾參年六月四日

## 評

南無妙法蓮華經も、歸命頂禮穴守大明神も其の人々の信仰より窺へは、均しく之れ渴仰すべき對境ならんと、詭辯を弄するものあれども、其道理、餘り放漫に流るるがゆへに、予は取らず、人に物を問はれて答辯に窮し、忽ち大聲に喝などと叫ひて、其場を暗まさんとする輩は、所謂野狐禪の域にだも至らざるがゆへに、予は好まず、本書武田君の人生私見は、論理稍々繁褥なるに似たりと



雖も、述ふる所、總て是れ誠實なり、所論苟も誠實ならんか、自ら放漫暗愚の弊を脱するも亦宜ならずや、出版前、予の友人櫻井君を介して、其稿本を示さる、予讀むに隨ふて妄評を試む、敢て著者の意を迎へんとするにあらず、只其所感を會釋なく筆跡に遺せしのみ、著者雅量予の妄評に懸念することなくんは幸甚

明治四十三年九月

退步居士 實然

評

余未だ武田君を識らず、今回友を介して私見一篇を視さる、把て之を讀むに其説くところ極めて穩當にして健實なり、此見地に住して世務を經營せば過なきに庶幾乎、余は深く信念に乏しく理想に缺けたる今日の實業家中に於て君の如き人を得たるを喜ぶ。

唯々余に一の問はんと欲することあり、曰く君能く地獄極樂を信ずるや否や則ち



これなり、地獄極樂は上知と下愚と能く之を信ず、中知のもの多く信ずる能はず、近頃宗教を信ぜんとするもの日を追ふて其多きを見る、然るに皆地獄極樂を度外視して而して偏に佛を求め神を求む、余其予盾を笑ふ、君今宇宙は無限なり理體は絶對なりと云へり、然るに果して地獄極樂を信ずるや否や、若し信ずる能はずと云ふならば是亦矛盾たるを免れず、矛盾のものは搖動なきを保すべからず、危哉、請ふ君の右に對す

る信念を聞かん。

稿を返すに及て一言を其端に録す。

文學博士 前 田 慧 雲



御高評用箋

拙著人生私見御一讀之上御主義御信念左に御記  
入御郵送被下候は一層幸榮之至に存候



御高評用箋

拙著人生私見御一讀之上御主義御信念左に御記  
入御郵送被下候ば一層幸榮之至に存候



明治四十三年十月十日  
明治四十三年十月十日發行

發行兼編輯者  
武田明

印刷者  
北村榮次郎

發行所  
武永商會

印刷所  
北村商店印刷部

東京市日本橋區箱崎町四丁目一番地

東京市日本橋區箱崎町四丁目一番地

東京市京橋區中橋和泉町一番地



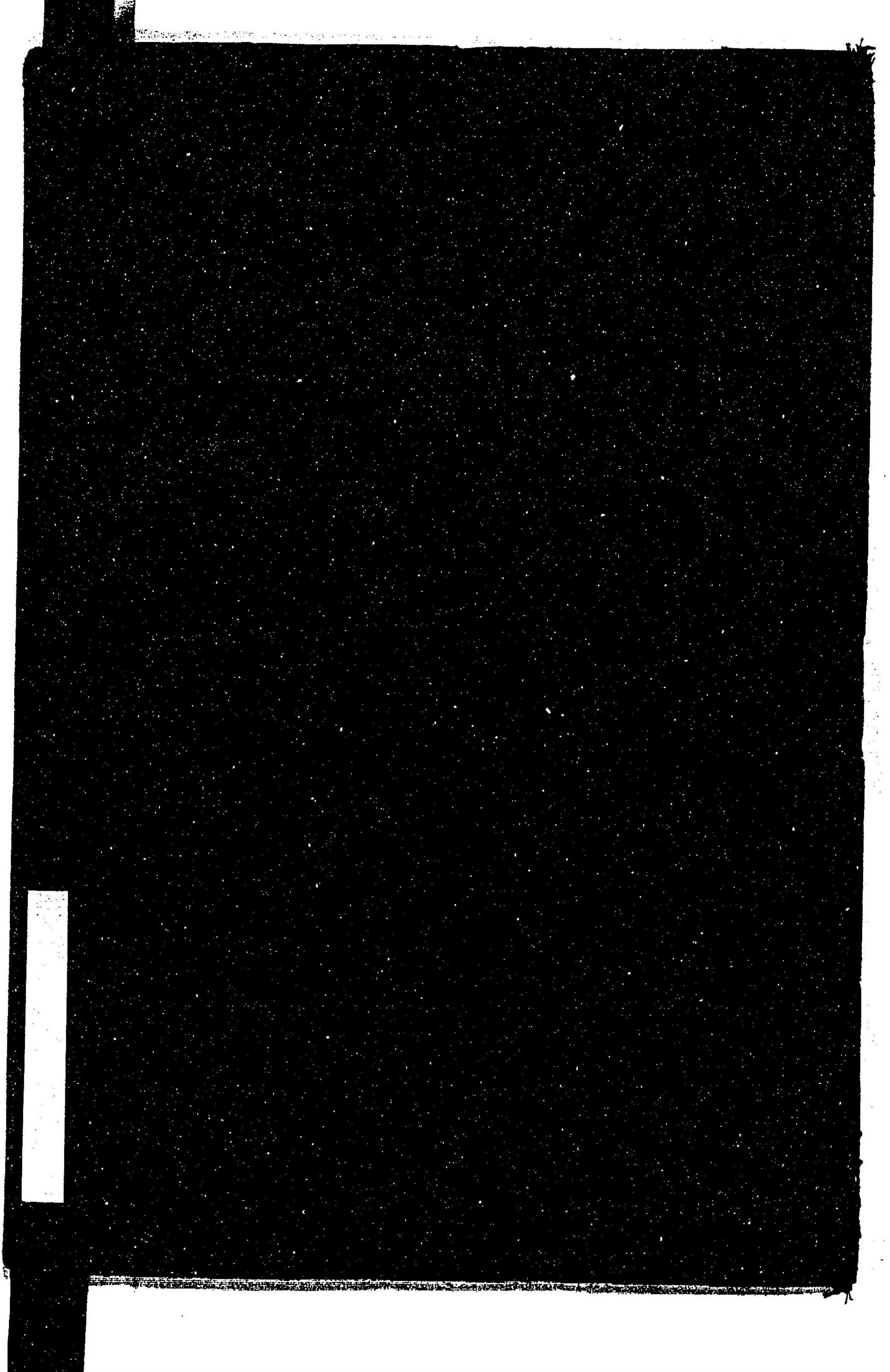
324

206



324  
206





Small, illegible text or markings on a white rectangular label or strip, positioned vertically on the left side of the dark area.